

駿河台大学 IR 実施委員会 英語教育成果分析レポート

駿河台大学 IR 実施委員会

1. 本レポートの目的

英語教育の成果を分析・公表することによって、本学英語教育の発展に寄与すること。また、初年次教育へ分析結果をフィードバックすることによって、「愛情教育」「教育力の駿大」をより強力に推進すること。以上の 2 点を目的とする。

2. 分析方法

分析データには、2012 年度から 2014 年度までの入学者における国際英語検定 G-TELP（レベル 4）のスコアを用いた。本学では G-TELP を、1 年次 4 月、1 年次 12 月、2 年次 12 月の計 3 回実施しており、統一基準による客観的な時系列データとして、効果測定に相応しいと考えられるためである。なお、G-TELP（レベル 4）は、GRM（文法）、LST（リスニング）、RDG（読解・語彙）の 3 分野について各 100 点満点で評価するテストである。

3. 分析結果

G-TELP スコア分析において顕著な教育効果が見られたものは、LST（リスニング）と RDG（読解・語彙）の分野であった。（表 1）

表 1. G-TELP スコア

平均点+標準偏差	GRM	LST	RDG	TTL	(LST+RDG)
1 回目 (n=2538)	52.17±17.33	35.95±14.63	35.70±14.62	123.82±36.91	71.65±24.46
2 回目 (n=2203)	46.86±18.13	41.06±14.40	43.49±16.56	131.41±39.94	84.55±26.62
3 回目 (n=1926)	47.75±15.17	41.84±15.39	43.13±17.00	132.72±38.97	84.97±28.40

また、3 回とも受験した学生（n=1814）についてスコア変動を分析したところ、2 回目に 10 点以上アップした学生は LST で全体の 43%、RDG で 50%を占めた。また、2 回目でアップ出来なかった学生のうち 3 回目では LST26%、RDG21%（※全学生に占める割合）が成績アップしていたことも合わせると、LST、RDG ともにおよそ 7 割の学生において「英語学習における成長の実感」が得られていることが分かった。（図 1, 2）

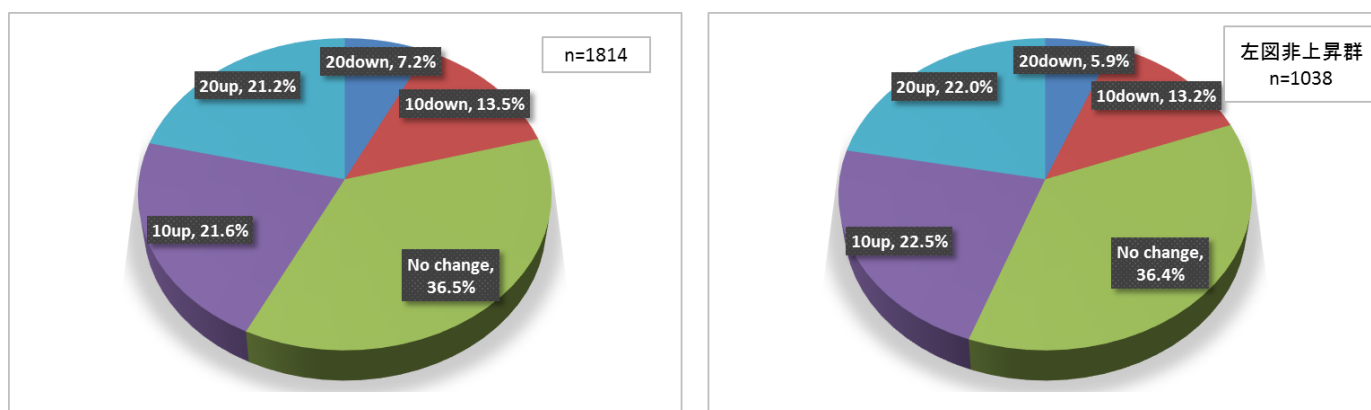


図 1. 左：LST スコア 1 回目から 2 回目のスコア変動 右：左図の非上昇群における 3 回目でのスコア変動

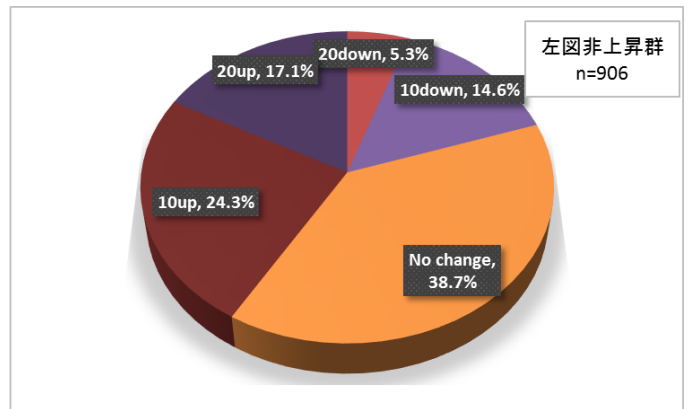
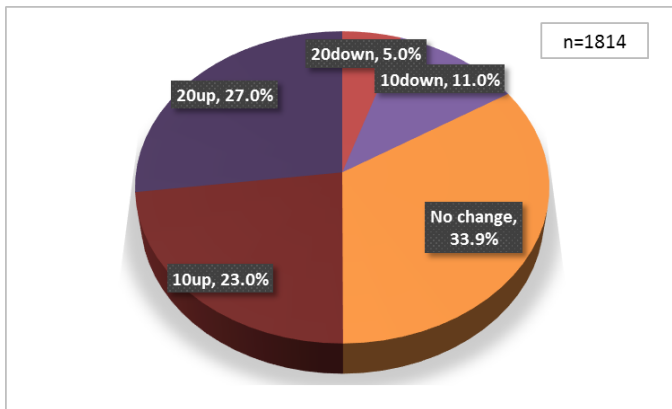


図 2. 左：RDG スコア 1 回目から 2 回目のスコア変動 右：左図の非上昇群における 3 回目でのスコア変動

4. まとめ

本学学生の全体的な傾向として、英語に苦手意識を持っている学生が少なからず存在する。初年次の英語教育においては、まずその苦手意識を取り除くため、英語に親しみながらリスニング力と語彙力を上げることに各教員が努めているが、それが一定の成果を上げていると言えよう。

(訂正)

平成 28 年 11 月 24 日： 図 1 右、図 2 右の円グラフにおいて、全サンプルにおける割合で示していたものを、非上昇群における割合に訂正。また、図中にサンプル数を明記。